

あまのたけ 七

~13
4269
7



八〇
九二六九
7

物草太郎卷之七

第十三回



僧房破戒汚寺軌

寡屋失節惹家魂



却説物草太郎多知縣新野左衛門が仁急少日毎に
生より酒飯ばかり多きは女のよく飲食の銀とおやひ品朝
夕山野も彷徨しまた多き富房は裡に外と一両月も起あ
は成を四五日も少く帰来さるまじもつりてあまたのせん
る物草もさげどもさ物草が親類生路ありしに
の令氏受るのふは又孤裡の纏住しものふと其忠気
しふ其家春をとり及た民に下は人民とく物草を郎親

物草太郎氏
訂題

91-2152

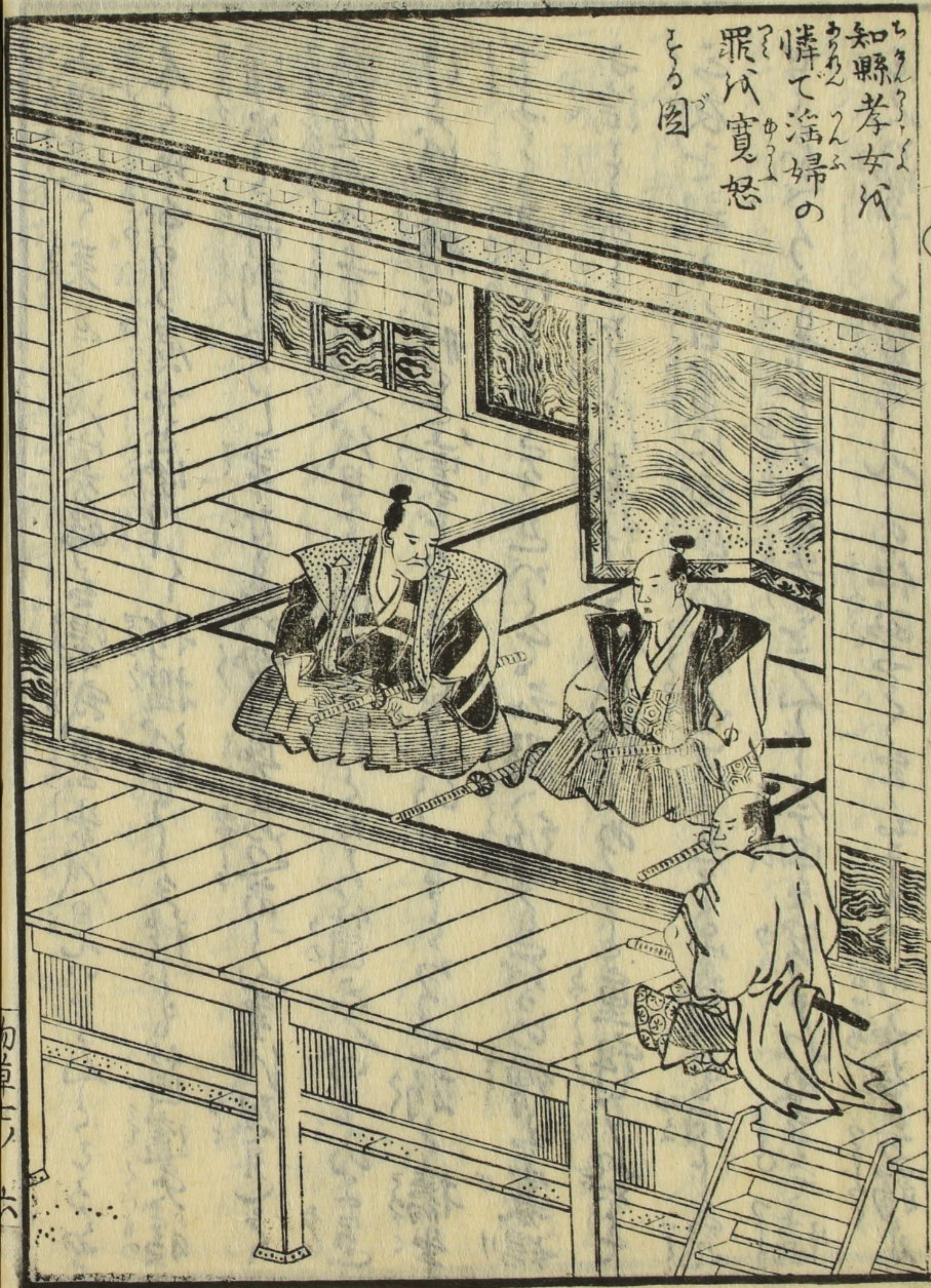
願ひもまじくは霊あるまじくは自然と物草を解
け教ひあまひつゝあはれ蝸房をまじく修りきりほつてと云
々々も敢てと修りて教へば鷹を修りて客の易に少事
足りん今列位の造替との志を觀の美は鳥少あつてやこ
の物草を我と善とありて人の耳目を觀と飾りてを
鷹は修りて賜ふる酒は造之て喫しめ修りて我
一身の主宰ありて緊要になつてや有るはつて云々修り
て一齋の其理を修りて物草を所へ賜ふ酒は男
府鎮より美酒はつてあつて一かり然るは箇村をばと
小真福寺とつて一個の寺あり近隣の寺は門を以て閑黒の

夜中を以て蕭々たる雨をりて一個の大精ありては偶に
るよの壮実の男子と云々も忽ち陰氣肌を夜とつて
毛襟をび是と云々とつては路は水とて北歸りて驚き
て再び其達よむりて又虚怯の人と云々よあつて
一齋肉を以て正氣を修りて箇大精の白時おはて其白を
異は白た衣と穿て黒と髪は長くとつて唐の辺未と
深々と女の寛鬼と云々ものりて又破りて傳衣と云々
素門の鳥と云々首頭飛頭臺のどく近頭鬼と云々
大魁は云々ものりて又一個大なる竹の子は被る少
事なあつてもありて人見ると云々異とて其怪同と云々



箇地よつてありけるやと起て往んたる里正行の女大精
多々天晚あつての逆出ばと云ふさう大精の逆出しく此告知
たせられと云ふ里正行呪の靈を退舎らるるや物草を即
が曰ふとい見さうさういふも有度あんと云ふ里正物草を
顔の辞詫異とせりども回く一五二十歳らうさうまが準言
おまごひ報知して其動作を見さうと云ふ時境その翌夜
雨とぬぬりて月さき遅れ宵闇の空好生暗うさうさう
と大精の逆出夜をぐと物草を即よかせるさう物草
大女高興さうさうとほびさうさうさうさうさうさう
一筆紙致と箇冥福寺の辺さう大精のや逆出やと信

とのおさふ二更過る比冥福寺門王と開れ裡面よりその形
いさやと僧の出て睡路はさひさひさうさうさうさうさう
物草太郎後面より個大精の圍膝を捉え引りてさう物草
代細道る其面夜めの鬼面つさうもあさぬさうさうさう
たうに尋常の人さうさうさうさうさうさうさう物草
を郎捷も其膝に執り抱翻し麻索にりて縛縛さうさう
御中のお駈見物草太郎が回らまらさうさうさうさう
目をくくおさうさうと把火おど燃さうさう十人さうさう
物草が大精に傳しめ回さうさうさうさうさうさう
里正がさう一甲りて箇大精さうさう身は冥冥福寺の長老さう



知縣孝女
憐て淫婦の
罪以寛怒
とる図

まじりたる孝をかりと褒賞はせりける誠は天僧奸人の人達
りめりし悪をばかりと遠近にば傳へて處子の孝を
は慶め物草を郎が膽氣はくくきりける却流る信濃
の國の房崎大納言者幸郷の國司をきりける南郷の領
郷より一個の人をばりて使にえりけるよこのあまじの郷
よりも誰と遣さんおとく商議區くみりける罰とくみりける
たんのの紙をきりて衆口區くして未一決をりりける
一人のきりて我門鄙野の都へ出り勤司せんとも好生せりける
かたきりてもかた物草太郎と代り移りて登りたんのいりける
お実整背酒飯とせりける指紙屈して數をばりて是年かきりける

るは紙りて浪を洗ふるもきりてと云に里正が曰街道へ
と失下り知縣は馳せりけるよの白痴をば都の勤司へ
又意似りの善よあまじの事でもすふとふ流るた去ぶる先懸
て目をわくと一兩個の人物草が蝸房に至りける物草どの今
回都より我門の中一人と云のせりて役使を謀る我門きり
家養ある身より都へ登りてきりて此より月酒食
紙をりてきりて報は我門より代り移りけるなまじりける
抱き物草太郎頭と持りける你們の欺せりける所は我まじり
るは紙をきりてきりてふたの尻を流すといはきりけるよ
たは蝸房おけりけるよなまじりける都へ登りけるよ美女は迎

暮らして鄙野の人と頼み情はなほとど死後の女子
を情あつて心ざらむとくたがひと思ひあつるもどめつこの人
が書もあざと賺しきまは物草を即微嘆く後のこころ
たぐらむ心なほつらへしとまらむもどめつとくたがひの聴く准
備をりしんぞ頭

第十四回
湖水上掠擒客一船
山寨裡屠戮克一賊

却沈里正ひくぬ郷中大よび盤纏はくもの物草太郎
遊樂しきま物草を即と隨即起行せしめあつる身中を
あはれ信濃布のひくまき懸懸は眉尖カれど草履履

とれはひれ一信濃の國はまきあつるぬ縁の空そと孤身の
頃あはれ行止心のまきあつるぬ郷は笛の書あつる懸懸は
情は惹あつるまきあつるぬ日のカバ極めし行かぬも執柄
鹿山まきあつる唯一人の山経行本の中に至りしに叢
林の中は四五個の強盗も紫火の煙はく團圓居らるる物草
を即一個夜を侵し来るは目まきまば筋経てあつる人々と高
深に物草を即と紫火の煙はく迫れば天曉たつるんぞ
氣強し我れもすし陽氣は然しとく手足と紫火の
切らむとあつる懼怕けしたあき拳動あつる強盗
も調眼色とあつる紫火の煙はく出らるるためありし一個の

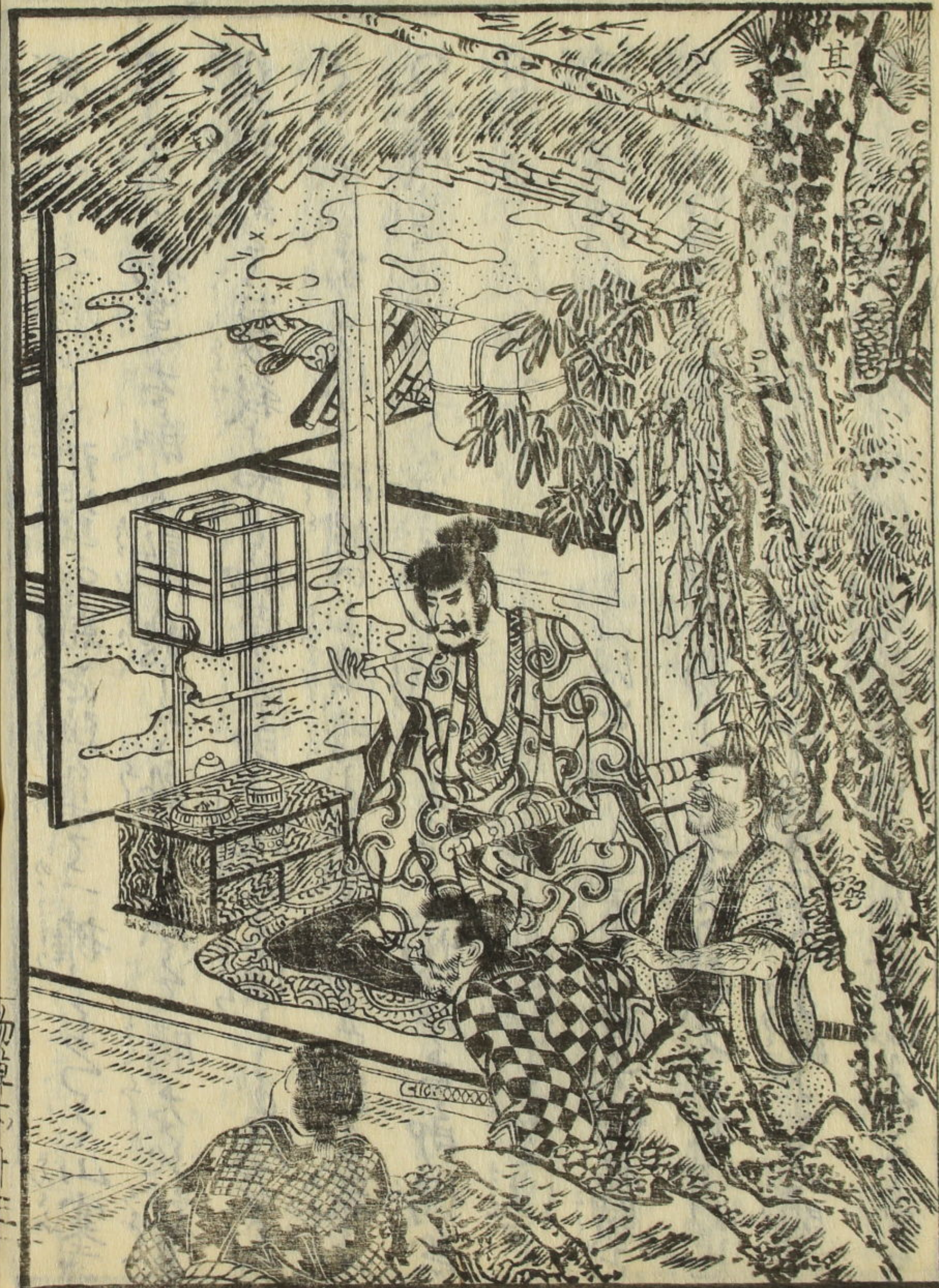


強盗物草太郎が背負ひし藁包は目も你の決りお負ひ
まし甚麼にけりぞし手紙うけんぞしに忽地呀と一聲おれ
正体あり此光景に如るに兩人物草を左より接連之斬
てうらゐり物草就地二個の刀は奪ひ背をり兩個の賊と志
まきふ輕のあせび哉二個の賊之物草左郎が威風は怖と
いはくもさき逃去る物草左郎を業火にや之れは
よくえんはのぞしてあらぬし一駱の小喽囉もどに把
火にやとく十五個物草を所をさき物草身を
してさきはれお前も逃去し二個の賊当先より二個
炬折刀は掉し物草左郎と陽集て斗喚るは大王命

あつ係連めまきし目よりさき引きて引きてさき
物草太郎呵いさき我往まを思は後門の蠢賊と志
ん和大王とつ右右のおりさき往て逢はし後門御導は
と女しも忍も氣もろく泰然とて起上大踏歩して
進行し火霧多の小喽囉二隊とあつ物草左郎をさき
行々後と哉岳火起り一少門もさきた暗號は合門と開て
りさき難題畫壁廣度救十間繡帳を寢る裏面より
六尺有糸の火の漢さ身に袖眼と就衣穿腰は朴は挿其
相好生確御しとく克悪あつが出まらり物草左郎と對ひ
你的未段も物草の者お強き聞し方り備えいさきお

此光景ハ見く物草太郎が饒勇におもひ西京亂捕小四散
奔走の物草を即き刀の血はけぬぐひ鞘内よきあき那
帳中に入見く酒氣直中に固く嗜酒なればはこめ、搜
索小屋の隅角に大なる甕あり這りありと蓋はく、中
に數斗の美酒を溢らすて感得る物草太郎報言して
揺下小瓶を啖水盃にぬぐくても中々に挑舌下物をめ
めと左側は見まり、くろに猪羊の肉店上あり、なればこ
屋敷のものこく大木はび小及以て切陷喫些の瘦骨と体
ころいご然時間此を憇んと眩を曲く枕く、鞆を地
して新く、大膽を敵の拳動りり先前は素きく

属下の小嗜囉とも班草の賊を強集て一擁く、あつて山塞
開り来る物草を即か鞆を捲くて新く、はく、眩を地乳臭
見縛縛て輕殺とる物草太郎が枕辺を逼り、下へ
とくるは、進一、兩個の小賊、呀とて、く、仲と衆
の小賊、茫然とて、た、長く、喊叫あつて、物草を即偶然
目、大、你、大、歳、頭、上、小、木、は、動、も、や、と、跳、躍、て、を、進、一
兩、三、個、は、後、の、拳、法、を、く、忽、ち、翻、く、一、派、を、敵、十、個、は、賊、を
押、め、縛、え、る、お、其、勢、に、逃、易、く、て、衆、多、の、賊、大、木、を、ね、じ
も、立、ち、勇、気、魁、首、は、敵、殺、死、の、お、目、下、の、殿、も、人、間、お
き、り、御、免、科、我、門、の、克、惡、は、い、ま、め、た、ま、さ、る、や、ま、



天物中くも我れ所めく舌は中た身はゆり一をを虚空
かま中へくも一刺も達と急ん
と早已幾更けりやと天の光景は観ふ母の幸刻けりも
行もその又超行とす。に隣房内よ女の泣哭声の聞ふ
あや一もかか声は志るも後桶はひりた燈を照して
と見よ六年のころ十八九歳の姿色ある婦人の傳め
祇も葦草は合ませ柱下も撃たる那芙蓉苔の風雨は
おのひも花枝を損したる光景をり物草太郎は是
て早も白や一葦草はくすくすやよ婦人かめ故ありてわ
事ため中を達めりごとく尋ふ個婦人只目も閉て早く命

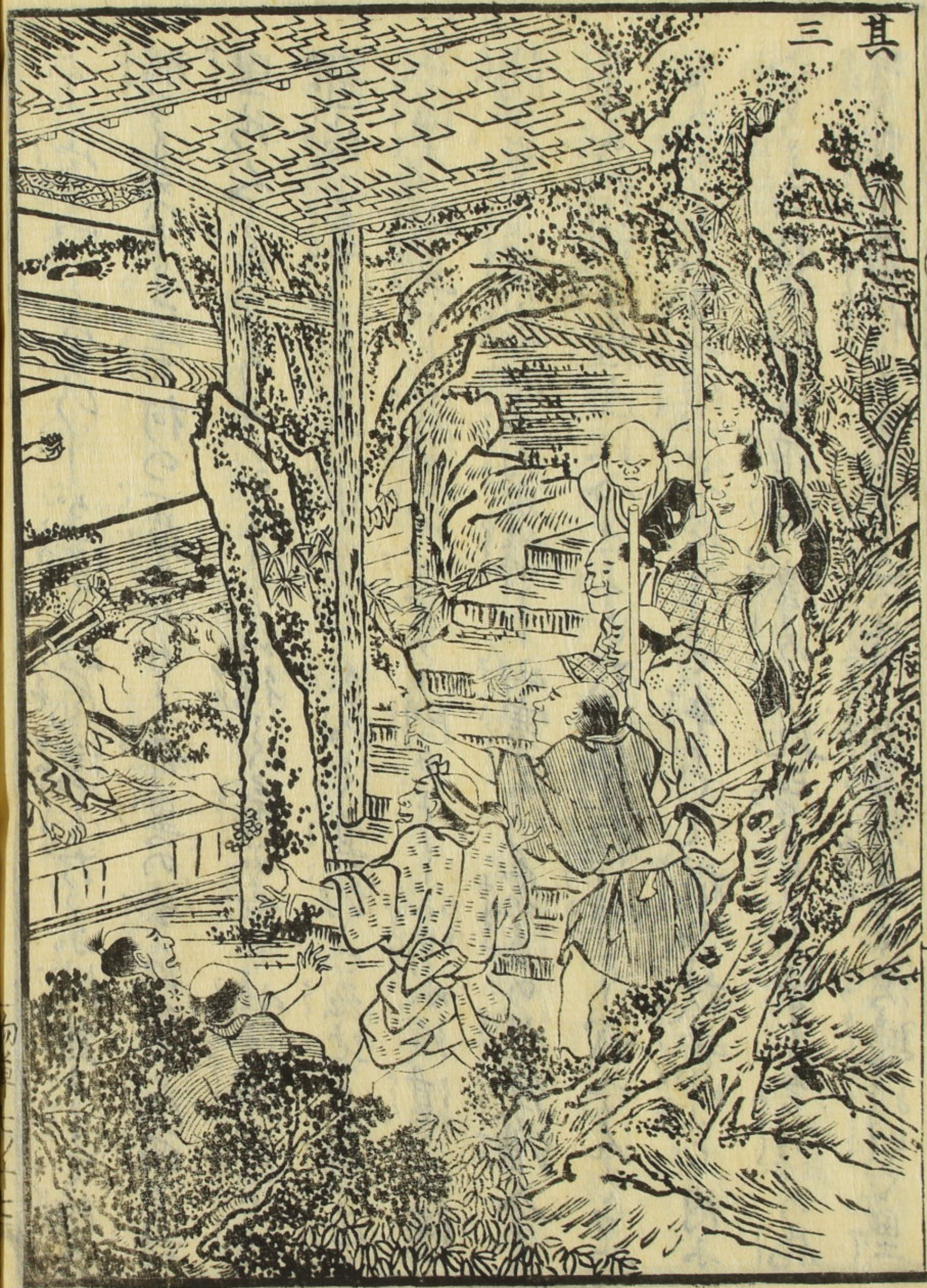
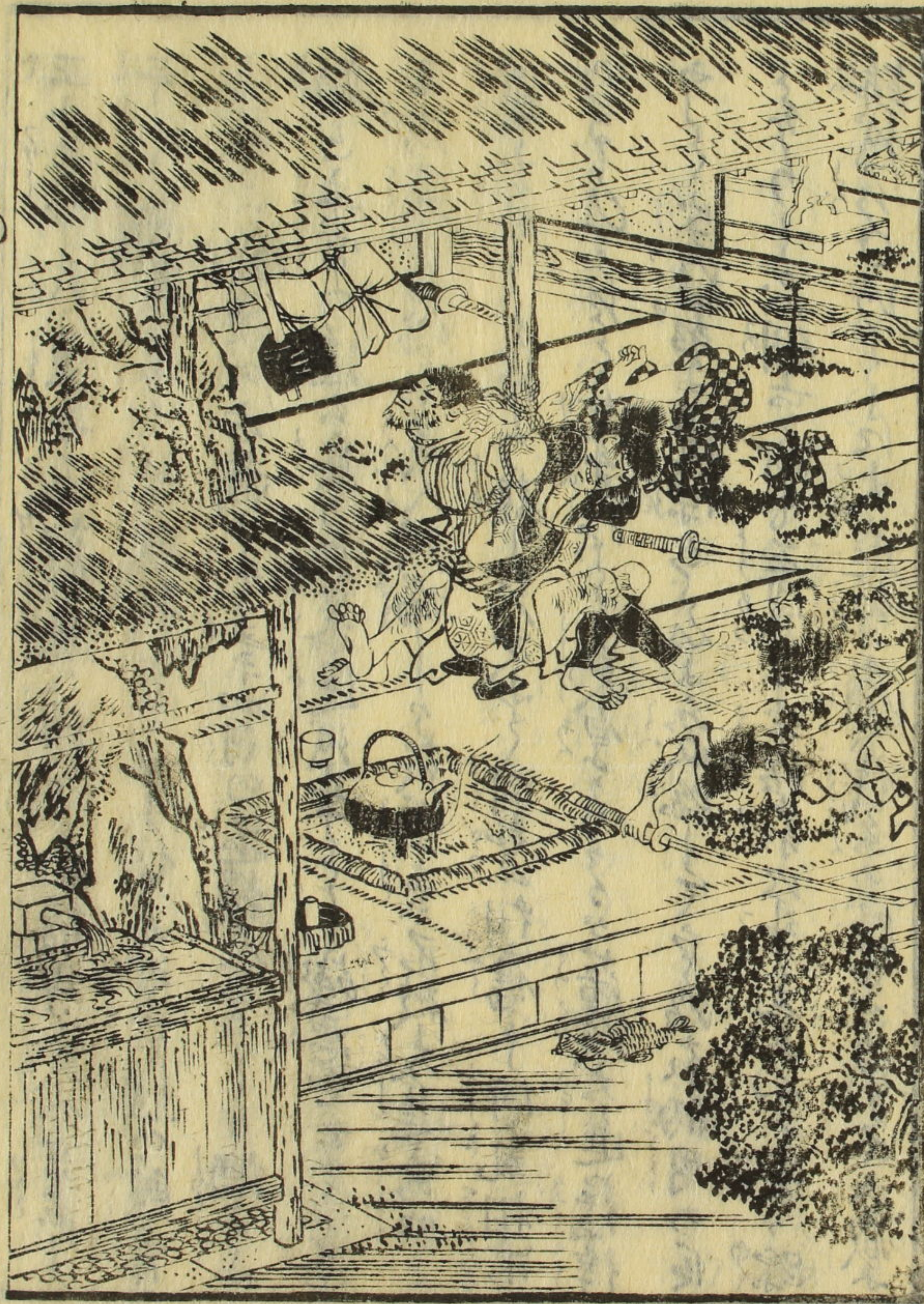
次後く我節を合さるめお仁急かて一尚好とふん
と形も舌は唾ぐ一念悪をくも此怨恨をば
に物草ぬも賊の為も勾引し一かめと案一大呼と作
の響たる克賊も我は已に破殺せり婦人といふも今に細
うも通すもつた那婦人涙とくも目もしては目もに賊
か之はくも悪法客と目も達頭垢面のももくも
したる漢もいれも那賊と殺したるも一も一も
や宵もも構はくも一も一も一も一も一も一も一も
ふ言も那漢もに賊と破せりも一も一も一も一も一も一も
は個易くも滅くも一も一も一も一も一も一も一も一も

めり辨才天女の獲法力ありりるるも漸くをよきとめ
物草太郎小對ひ妻を京師の武士松浦雅事かきあけり日
から辨財天女信ト前日江の竹生洲の廟祠へ拈香の志
ありて家の蒼頭を髪籠に後一隻の船は琵琶湖は流め
願のぞく拈香でしが帰船の水路二隻の船は後流成で船
中法男女のくは屠殺でし妻も又の下流鬼をあらんとを
胸はきりめりに唯妻一人を報はりて船は矢の如く飛陸強
と鳥の如く翔て妻は一個の轎子よのせて此山塞くは山場り
逼りて妻はかまんとは妻誓を渠がふ小後をりて山尚も勲と
おとらぬるにふく厭煩瀬子と益を向しは食を費せしむ
まをくく一途に水を相まをせしむ女は身はかかへしはま
まをくくせしむもををくく郷導事とめ山徑は東西へ辨
かたは追越の賊は御らうと再び山塞くは山場り個々をめは
まをく渠が心は後しめんと七十三十四相話する妻と夫
あは身りしは後ひ死にてもやう渠が厚皮はけまトと妻は
喘くおん手も小後を妻ははかまをせするお力をくせしめ
命はくく長く妻は月夜をふり船りて道世の戒行ははく
寛尊のかさる昔もやとあさりく悲しく辨財天女は新誓
しく我厄災は形ひなすひて獲法力を顯しめしをよきとめ
信をよきし其の虚しうはくは子のよは後く克後と

めり辨才天女の獲法力ありりるるも漸くをよきとめ
物草太郎小對ひ妻を京師の武士松浦雅事かきあけり日
から辨財天女信ト前日江の竹生洲の廟祠へ拈香の志
ありて家の蒼頭を髪籠に後一隻の船は琵琶湖は流め
願のぞく拈香でしが帰船の水路二隻の船は後流成で船
中法男女のくは屠殺でし妻も又の下流鬼をあらんとを
胸はきりめりに唯妻一人を報はりて船は矢の如く飛陸強
と鳥の如く翔て妻は一個の轎子よのせて此山塞くは山場り
逼りて妻はかまんとは妻誓を渠がふ小後をりて山尚も勲と
おとらぬるにふく厭煩瀬子と益を向しは食を費せしむ
まをくく一途に水を相まをせしむ女は身はかかへしはま
まをくくせしむもををくく郷導事とめ山徑は東西へ辨
かたは追越の賊は御らうと再び山塞くは山場り個々をめは
まをく渠が心は後しめんと七十三十四相話する妻と夫
あは身りしは後ひ死にてもやう渠が厚皮はけまトと妻は
喘くおん手も小後を妻ははかまをせするお力をくせしめ
命はくく長く妻は月夜をふり船りて道世の戒行ははく
寛尊のかさる昔もやとあさりく悲しく辨財天女は新誓
しく我厄災は形ひなすひて獲法力を顯しめしをよきとめ
信をよきし其の虚しうはくは子のよは後く克後と

誅戮し終る事ごとく感激して偏に護法の功力に仰ぐ云々
此子の妻もなる思入りなりと云ひあつた物草太郎一五二十と
備細に聞我も京師に登る事と云ひ婦人氏送り中へと云
一云々我も此漢子の婦人と伴ひ行くと人の異なりも好ま
拙法を授けんと賊の衣女も穿力法をせ彼廟見に接して
寒風出てよととり都の事と云ひ急に走り却脱西三りを過て想
夫の本根法杖として熱時間睡目夢ごらふ白夜の老女
勿卒してわつと来り這深山山塞法の事年未だ果
を専ら行務を若くめ農民に害せし惡盜天誅の事
かく昨夜多賀神の威のひぬ倘然りて試み往く者

うと空やうと雲の　　がまのれ松風凍くたふ俄然とて睡り
醒るまへはうと南柯の一夢なりと奇異の事にかへりひ回る村
里はくくめうらうらふよと云ひ往く者もやと仕役們が十個
箇地に至り見ふ山中深くかへり其地を茲地とて搜索
ふ遙り山奥に巖石の壘と門戸と一溪水に湛く溝
池とせし要害堅固な構し山塞あり衆多の仕役准令
見よ彼試み裡面に入るととたがひは推解く我々へと云
このやういふや俱に入るとと手づか根と杖喊叫く肉小
入見よ六千個の賊縛縛められ居たりし守り多量の屍
首地よ外伏しありと云ひ皆く獲た早くと連珠回る里



正小告のりより里正より知縣廳へ送るるに隨即吏人を差し
そく拘繫せしめ皆殊獄とぞせしむる那盜賊の魁首
とぞいぬ鶴鹿の六藏とて素四圍の退糧人ありしは酒をふ
弱も平常の道も度り只暴逆は半くは殘忍をせしむる
不強盜とぞいぬ民人河橋より教渠素不破大進秀興と
四圍に在りしはより親しむ愛せしむる同輩相應り同氣相求
りしはひきりしはより身はせしむる交厚りしはより落後大進の徒
やとて宇治家より遭降せしはより交路して宇治家柄用の反
とせりしはより個六藏も玉成りし宇治家以事とせんしと常々
跡にたのりしはより大進朝廟へ代々の路よりかく六藏よ

初會りしはよりたがひみはせしむる今に會面を喜び左府公の毒も
かへりしはより當世の英主をゆりしはより下もさしはより輔
相く共に富貴は悦ばしむる永く捧録をよめしはより傳よと勸
諭せしはより六藏とよはしむる我情願ありしはより宇治家
中事へるるはより大進と南條と鶴鹿と素四圍の退糧人の要害を
ばの凶害も在りしはより自然事ゆりしはより車圍の兵は截断せしむ
定りしはより平常熟ししはより剪徑の賊とせしむる軍鎗金の設備と
編りしはより果ての屬下はより人陸國は横行ししはより或は富貴の
農民の財は侵奪ししはより或は往來の羈客を引利してその
實より自己せしむるはより大進二個は奢倖は極め淫酒は耽の資

